



目次

1. 平成 22 年度 FD 推進部活動方針
2. 平成 21 年度 FD シンポジウム報告
3. 初任教員研修会
4. 平成 22 年度 TA 研修会報告
5. 授業コンサルテーションの紹介
6. 他大学シンポジウム参加報告／訪問調査報告

平成 22 年度 FD 推進部活動方針

FD 推進部門長 上野誠也

重点テーマの設定

FD 推進部は、教員の授業改善のために、シンポジウムの開催や授業評価アンケートの実施などの活動を行ってきた。これらは定常的な活動として定着してきているが、教員個人のレベルでの教育改善が主であるため、組織的な取り組みとしての

方向性が見えにくい傾向がある。そこで、今年度の活動方針の検討を行い、次頁に示す 2 項目の重点テーマを設定した。教職員の目に重点テーマが触れることにより、大学が示す FD の方向を各教職員が認識し、相乗的な効果を生み出すことが狙いである。

FD カレンダー

月	行事
4	初任教員研修会 TA 研修会－実験・演習担当－
5	TA 研修会－講義・ゼミ担当－
6	公開授業 FD ニュースレター第 12 号発行
7	授業評価アンケート FD ミニシンポジウム FD ニュースレター増刊号発行
8	FD 合宿研修会
9	FD ニュースレター第 13 号発行

月	行事
10	
11	学生スタッフによる FD フォーラム FD シンポジウム 公開授業
12	FD ニュースレター第 14 号発行
平成 23 年	
1	授業評価アンケート
2	
3	FD ニュースレター第 15 号発行 FD 推進部活動報告書発行

〔重点テーマ〕YNU initiative の実現へ向けて

昨年度に制定されたYNU initiativeを充実するための教育改善について取り組むことである。全学的な目標に向けて、個々の授業担当教員が自分が必要なことを理解して実行することを期待している。そのための情報提供ならびに支援をFD推進部が担当する。前年度に活動を開始し、3月に開催されたFDシンポジウムでテーマとして掲げた。今年度は各部局に適した活動へと展開する計画である。

〔重点テーマ〕学生参加型FD推進活動の設立

今までの本学におけるFD推進活動は教職員の教育改善に向けての取り組みを重視していた。これは学生が授業に対して受身の姿勢であることを前提としていた。それに対して、今年度の活動方針の設定には、学生が自発的に学ぶための授業環境作りを新たに加えた。これは学生が授業に対して主体性を持って向き合うことを意味する。教育改善を推進する姿勢としては一歩前へ踏み出したことになる。この姿勢は既に実施している大学もあり、それらを参考に本学に適した範囲で活動を進める計画である。

新規事業の計画

今年度から新しく開始する活動計画として以下の3項目の新規事業を計画している。

1) 授業コンサルテーション

授業改善を希望する教員を対象に、授業におけ

る悩みや課題を解決する方策をFD推進部専任教員が一緒になって探すコンサルテーション事業である。各教員が持つオリジナリティを活かした教育改善を目指している（本誌14頁に詳細）。

2) 学生参加型教育改善活動の推進

重点テーマにも取り上げた今年度の活動方針の具体的な活動である。教育改善学生スタッフを組織化し、FD推進部教員と密接な連携をとりつつ、教育全般の企画・提言を学生自身が主体的に行う活動を推進する。

3) 「YNU 魅力的な授業を創る」の刊行

授業改善を推進する一環として、魅力的な授業を紹介する小冊子を刊行する。公開授業でも行われていることであるが、教員にとっては時間的制約がなく、いつでもどこでも手にすることができるサービス企画である。

FD推進部の転換

今までのFD推進部の立場は、各部局で行われているFD活動とは別に、全学的共通事項を担当する傾向が強かった。そのため一般論を提供する企画が主となり、各部局の実情に合わせた解釈は各部局に任せていた。今年度はこの解釈部分までをFD推進部が取り組むことを目指しており、より身近な組織へ転換することを活動方針に掲げたい。各教員の要望をFD推進部まで届けていただければ幸いである。

平成22年度 大学教育総合センター FD推進部

部門長・兼務教員	上野誠也	経営学部	松井美樹
兼務教員	金馬国晴	国際社会科学部	根本洋一
専任教員	安野舞子	工学部	森下 信
教育人間科学部	赤木範陸	環境情報学府	岡 泰資
経済学部	深貝保則	留学生センター	小川誉子美

平成 21 年度 FD シンポジウム報告

企画の背景

3月26日(金)午後1時30分より、「学士力」を磨く YNU Initiative の具体化に向けて」とのテーマのもと、平成 21 年度 FD シンポジウムが開催された。

「YNU Initiative」は、本学の4つの精神—実践性・先進性・開放性・国際性—を踏まえつつ、横浜国大士課程教育の更なる充実に向けて策定された教育政策である。ここには、①国際的に通用する学位の授与、②独創的な学士課程教育の実現を目指した教育課程の編成、③社会に貢献できる意欲的な学生の受け入れ、そして、④質の高い教育を提供するためのFD活動の推進という4つの方針が示されているが、今回のシンポジウムは、「①学位授与の方針」の中で示されている具体的な人材養成目標を達成するために、個々の教員に必要とされる授業の取り組み姿勢について考えることを目的に企画された。

この目的を達成するためには、まず、「目標達成型」の大学教育改善を先進的に行っている大学から学ぶことが有益であると考え、基調講演として山口大学から大学教育センター長の岩部浩三教授をお招きした。

続く分科会では、各教員が、自身の担当する授業において到達目標達成のためにどのような工夫ができるか、ということを考えるために、授業形態別(座学・一斉教授、グループ学習、実験・実習)にグループを分け、レポーターによる事例発表、および討論の場を設けた。

基調講演：「目標達成型大学教育改善の現状と課題」(山口大学 大学教育センター長 岩部浩三教授)

山口大学は、「高等教育の質保証」や「学士力の達成」の実現に向けて、他大学に先駆けて「目標達成型の教育改善」を実施してきた大学である。

開催日時： 平成 22 年 3 月 26 日 (金)
午後 1 時 30 分～5 時 30 分

開催場所： 教育人間科学部 6 号館 102 教室
／7 号館 201、210、211 教室

参加者数： 31 人

プログラム：

[全体会]

挨拶 YNU Initiative について・・・

溝口周二理事・副学長

目標達成型大学教育改善の現状と課題・・・

山口大学大学教育センター 岩部浩三教授

[分科会]

(1)座学・一斉教授分科会：社会科学系における授業改善とカリキュラム改革、学生参画・基礎演習と専門科目

(2)グループ学習分科会：講義の中でのグループの授業案づくり、「グローバルスタディ・ツアー」に向けて

(3)実験・実習分科会：製図科目への模型製作の導入、コンピューティング演習における課題の選択

[ふりかえり]

平成 20 年度には、その取組を定着・発展させるための教育支援プログラム(「目標達成型教育改善プログラム～ラーニングアウトカムズを重視し

た大学教育改革の組織的取組〜)が高く評価され、「質の高い大学教育推進プログラム(教育GP)」に採択されている。今回講師としてお招きした岩部浩三教授は、同大学の大学教育センター長としてこのGPの取組を推進されてきた。

そこで、基調講演では、学士課程教育の目標達成のために、山口大学では具体的にどのような取組を行っておられるのか、その現状と課題についてお話いただいた(以下、基調講演の趣旨)。

山口大学では、大学教育が「何を教えるか」という教員中心の教育から「何を学んだか」という学生中心の学習へと視点がシフトしていることに鑑み、早くから、卒業生が備えておくべき資質を「グラジュエーション・ポリシー(GP)」として策定した(平成17年度〜18年度。なお、このGPは、現在一般的に言われてる「ディプロマ・ポリシー(DP)」と同義である)。このGPを学士課程教育の人材養成目標とする一方で、各授業科目における到達目標も明確にし、その目標はWebシラバスに明記されている。

一方、このGPとWebシラバスに記載されている到達目標の対応関係を示すものとして、「カリキュラムマップ」も作成されている。この「カリキュラムマップ」を見れば、どの授業を通じてGPの各人材養成項目を達成するかが一目で分かるようになっており、まさにこのマップは、GPを実現するためにカリキュラムの「整合性」を図る役割を果たしている。

なお、GPとカリキュラムマップは、学部・学科毎に策定/作成されており、このカリキュラムマップの作成プロセスがFD活動になるという。

基調講演の中では、特にシラバスの到達目標の設定の仕方について詳しくお話をしていただいた。まず、目標の設定にあたっては、「4ヶ月(1 Semester内)で到達できるもの」にすることが大切であり、「到達」とは成績でいう合格最低レベル(可

=60点)を指すという。また、そうした到達目標は観点別(「知識・理解」、「思考・判断」、「関心・意欲」)に列挙し、学生を主語にして記述することが肝心であるという(例えば、〇〇ができる、〇〇を身につけている、など)。そして、教員同士で出来上がったシラバスを参照し合い、目標設定や授業内容に重複がないか確認することも大切であることが指摘された(まさにこれがFD活動となる)。

このように山口大学では、GPの策定やカリキュラムマップの作成、そしてWebシラバスの運用を通しての「Plan」から始まり、実際の授業(「Do」)を経て学生の授業評価、教員の授業自己評価、ピア・レビューによる「Check」を行い、FDを通じた改善を行う(「Action」)という形で、目標達成に向けた教育改善のPDCAサイクルを回しているという。

この教育改善の特徴は、やはり、本講演のメインであった「Plan」の部分、すなわち、GPやカリキュラムマップ、Webシラバスにあり、これらを全学規模で実施している(GPフォーマットの統一、全学Webシラバスの運用、カリキュラムマップフォーマットの統一)ところに鍵がある。この教育改善の促進には、電算システムとの連携・統合が大いに活かされているが、本教育改善システムが円滑に回っているのは、ひとえに大学教育センターの地道な活動によるものといえる。すなわち、センター(のスタッフ)が各学部のサポート役に徹し、GPの策定やカリキュラムマップづくりの際に必要なアドバイスをしたり、時には作業の肩代わりをしながら、個々の学部に合わせて活動を地道に行っているのである。ここに、目標達成型大学教育改善の要諦がある。

分科会報告

1. 座学・一斉教授分科会報告

話題提供「学生に興味を持ってもらう授業づくりの改善事例」青木洋教授

経営学部の専門科目、比較経営史 I II の授業を昼間主コース、夜間主コース隔年開講で担当している。従来型の歴史の授業は教科書を指定し、教員がその内容を要約して一方向的に講義する形式が主流だが、歴史に興味のない大多数の経営学部生にとっては100聞いて身につくのはせいぜい5~10。身につくとは、定期試験後も、卒業後も、心に残りつづける授業であること。教える量は70くらいに減らしても、20~30くらいは身につく授業を目指している。ピーク時から比べると教える内容は半分以下。受講者は昼間主が200人から300人、夜間主が100人から200人程度。評価方法は出席・感想が50%、授業中に実施するテストが50%、授業中の発言に対して+加点。

テキストは指定しないで、プリントをダウンロードしてもらう。板書はしない。時間の無駄である。講義内容の説明は最小限にとどめる(90分授業で15分程度)。徹底的に学生に問いかけ、考えさせる。学生の意見は最大限尊重し、受講者全員で考え、答えにたどり着くようにする。毎回、学生に授業の感想をA5大の紙に書き、授業の最後に提出してもらう。授業中に発言した場合にはその内容も書いてもらう。授業改善の手掛かりも多数含まれている学生の感想は最大限尊重する。学生の興味を引くことに集中し、授業中の90分だけで学生を評価する。授業に100%集中させる。学生のおしゃべりは注意しない。突然の出来事を大切に、必ずしも計画通り進めようとはしない。

青木教授の報告の後、時間外学修、グループ討論、発言機会の公平性、テストの形式、知識の体系化、TAの活用方法等、一斉教授に関わるいろいろな問題について意見交換を行った。(報告 松井)

2. グループ学習分科会報告

話題提供「講義の中でグループの授業案づくり」金馬国晴准教授

大学でも学校でも、理論と実践の分断が問題となる中、「創る」ことを通じて、理論を実践に活用し、両者をカリキュラムや学生自身の中で総合できないか? 初等生活科教育法(主に学部2年)での試みをもとに議論した。

各学生がこだわりたい問題を立て、小レポートに。→創りたい単元(授業の何回分かの連なり)のテーマごとにグループ組み。→各回で、前半は単元の各要素に関するレクチャー、後半で、個人でふせん紙を書き、グループで分類をして貼り並べる。→何回か後にそうした記録のうち、単元案に盛り込む部分を選ぶ。→単元案の書式に書き出す。→「単元案発表会」(模擬授業を含む)。全員がふせん紙で相互評価。→各グループが新聞にしてきて配布。→個人での単元案レポート(最終試験として)。

話題提供「実践とディシプリンの往還--教育人間科学部国際共生社会課程 グローバルスタディツアーとカリキュラム試案」松原宏之准教授

日米両国の学生間対話をめざしたカリフォルニア大学サンタクルーズ校での共同講義(2009年、2/15~22)の報告である。衝突の淵源を探り、ときほどく場を意図した「記憶の<共有>」プロジェクトで、第二次大戦、アジア系アメリカ人の経験と人種関係、戦後の日米関係について、国大生がプレゼンして討議をしたという。そこでは、アメリカ人学生に「日系アメリカ人」についてプレゼンするために、また、異なるバックグラウンドをもつ彼らと戦後日米関係を論じるために、学問が必要だと、学生たちは気づいたという(学問の再導入)。

また、カリキュラムとしては、最初に壁を設けることにより、学生たちは、実践≠狭義の「発信」

ノウハウではなく、実践＝他者へと開くこと、それが困難だからこそ、基盤的学問へ戻るべきことに気づいたという。いわば、積み上げ型からの逆転であり、一科目内では手に負えなくなる。理論と実践の対極から、一体的なく実践とディシプリンへ。ヨコハマ発ヒューマニティーズ教育を提案したいというチャレンジングな報告であった。※図らずも、二つの報告は、現実・実践から学問・理論へ、という回路で一致した。さらに、学問・理論を生活、実践の場へと返して「活用」できれば完璧である。 (報告 金馬)

3. 実験・演習分科会報告

実験・演習で育てる実践的「知」

講義等で学んだ知識を応用する力をつける目的で実験や演習がカリキュラムに組み込まれていることが多い。その役割を担うとともに、実験や実習を通じて、より幅広い実践的「知」を育てる方策を探る目的で分科会を構成した。具体的には、実験でどのようにすれば学生の「思考力」を伸ばすことができるか、個人ベースの演習でどうすれば「コミュニケーション力」が育つかなどが課題である。二人のレポーターに実施例から話題を提供してもらい、それをベースに全体で議論を進めた。

話題提供「コンピューティング演習における課題選択」白石俊彦講師

白石講師は工学部ベストティーチャーを受賞しており、その教育内容は学生からも高く評価されている。対象としたコンピューティング演習は、学生の個人技量を育成する内容が中心である。学生は端末に向かい、自分のプログラムに集中し、他人とのコミュニケーションが失われがちである。その中でどのようにしてコミュニケーション力を育てているかという方策には、TAの活用があった。

教室内を巡回する TA が学生個々の進行状況を把

握し、的確な相談相手となる。理解が不足している学生ほど疑問点を他人に伝えることが苦手である。学生は自分が分からない点を人に伝えることでコミュニケーション力を身に付けていく。一方、よく理解できている学生にはより高度な課題を与え、意欲を伸ばすことに心がけている。TAを活用したきめ細かな指導が、個々の学生に合わせた教育を実現していた。

話題提供「製図科目への模型製作の導入」 村井基彦准教授

ひと昔前の製図科目は、巨大な製図室に製図板を並べ、学生が黙々と図面を描いていたスタイルであった。その単純作業の科目に「思考力」を育てるための試みが紹介された。



学生が紙で製作した船体模型

従来型の内容では、企業での即戦力となる人材が育てられた。製図科目の中で学生が始めて習得する知識が多くあり、知識獲得型の科目であった。模型製作を導入したことによって、学生はモノが作られていく過程を学び、最終目標がイメージできる人材育成を重視することができた。今までに授業で学んだ知識のつながりを再認識する体験確認型の科目の特徴を持つようになった。

実践的「知」を育む方策

ひとつの科目で4つの「知」を全て育てるには無理がある。複数の科目が協力して実践的「知」を育てる必要があるという認識の下で、議論された。時

間をかける教育が実践的「知」と育てることに効果的という方向性が見えてきた。討論で出された発言を紹介する。

- ・ 実験準備や片付けの中にも教養や知識を養う要素が含まれている。
- ・ 間違いを体験させることで、学生の思考力は活性化化する。
- ・ TAのように初対面の人と話すことがコミュニケーション力の強化になる。
- ・ 社会に結びついた課題を示すことで、意欲や倫理観が育つ。
- ・ 成果が目に見える実験・実習は意欲が出しやすいが、小さな満足の積み重ねも必要である。

(報告 上野)

FD シンポジウム ふりかえり

実践的「知」の実現へ

分科会を終えて参加者は1室に集まり、各分科会で議論された実践的「知」を授業の中で育てるための方策を紹介しあった。まず、各分科会から4つの実践的「知」に向けて考慮すべきことの報告があり、その後に全般にわたる議論へと発展していった。所属している部局が異なる参加者による議論であるので、様々な視点があって有意義な議論が展開された。ここに発言の一部を紹介する。

◆各分科会からの報告

1) 知識・教養

- ・ 学生に100を教えても身に付くのは5程度にしかない。それより、70程度までを教えて20ぐらいを身に付けるのがよいこともある。多く教えればよいというものではない。
- ・ 一斉教授で知識を身に付けさせるために学生に答えさせる方法もある。
- ・ 講義の前半で知識教養を習得し、後半のグループ作業でコミュニケーション力を養う手法がある。後半の実体験で全ての実践的「知」が必要となる。

- ・ 実践的な現場での説明や調査という実体験により、学生が知識の習得が必要であることに自ら気付くことがある。
- ・ 理論が完全に身に付かなくても、現場に入れば実践に使えることが可能である。教育実習を1年や2年から取り入れる教育方法も最近注目されてきている。
- ・ 一見無駄な作業のように見えても、教養が身に付くことがある。教えたいことだけに絞るとこの点が欠落する。

2) コミュニケーション能力

- ・ 初対面のTAを入れることによってコミュニケーション力が育つ。
- ・ 社会へ放り出すことで自然と付いてくる。ただしある程度の知識がないと無理である。

3) 思考力

- ・ ミスを体験させると考える力がつく。
- ・ 正解が一つでない課題を与えると思考力が育ってくる。課題の選び方で学生が必要とする「知」が変わる。

4) 意欲・責任感・倫理観

- ・ 時間をかけて大きな課題を築きあげていく中で自然と学生の中に責任感が養われている。
- ・ 社会的な大きな課題とすぐに達成感が得られる小さな課題を混ぜると意欲を持続させるのに効果的である。

◆全体討論

- ・ ひとつの授業で4つの実践的「知」を習得させることは無理である。カリキュラム全体で習得させることが大切である。
- ・ カリキュラム全体で扱うとしても、学生が他の科目との関連を認識することが前提になっている。
- ・ 科目間の関連が分かる樹形図を作成しても、学生がその意味を理解することが必要である。
- ・ 大切なことは重複して教えてもよい。その場合はカリキュラム作りの段階から意識的に重複させることが必要である。
- ・ 同じ高校の教職にしても、学部によってキャリアのイメージが異なる。知識の差があっても現場の要求は満たしている。

初任教員研修会

FD 推進部 上野誠也

平成 22 年度の初任教員研修会は、平成 22 年 4 月 1 日(木)13:00 より教育文化ホール中集会室において開催された。前年度の 4 月 2 日以降に採用された教員を対象としており、附属学校教員を含め約 70 名が参加した研修会であった。大学の教育理念・教育目標などを踏まえて、魅力ある授業を行うための教育改善に取り組む姿勢を理解してもらうことと共に、初任教員が部局を越えて本学の帰属意識を持つきっかけとなることを目標に掲げた。

例年通り研修会は二部で構成されたプログラムであったが、今年は第二部に新しい試みを行った。昨年度までは、全学的な共通事項を第一部で行い、第二部は各部局でそれぞれの実情に合わせた研修を行っていた。ところが、部局によっては初任教員の数が少ないところがあり、十分な部局での研修会が実施できない問題点があった。さらに、初任教員のほぼ半数は附属学校教員である。大学教員と教育に関する知識も今後の授業内容も大きく異なっている。そこで、今年度は第二部も全学で一本化し、その代わりに大学教員と附属学校教員とに分ける研修会を企画した。附属学校教員の研修

会は教育人間科学部に依頼することとし、FD 推進部は大学教員を対象とした研修会を担当した。以下、第二部の大学初任教員を対象とした研修会内容を報告する。

大学初任教員を対象としたプログラムを以下に示す。

平成 22 年度初任教員研修会プログラム

第一部

13:00-13:10 大学の概況について・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・鈴木邦雄学長

13:10-13:30 本学の教育について・・・・・・・・・・
・・・・・・・・高木まさき大学教育総合センター長

13:30-13:50 情報セキュリティについて・・・・・・
・・・・・・・・額田順二情報基盤センター長

13:50-14:30 就業規則、セクハラ対策等について
・・・・・・・・村田憲幸人事・労務課長

第二部（大学初任教員対象）

14:45-15:00 FD とは・・上野誠也 FD 推進部門長

15:00-15:15 授業コンサルテーションの紹介・・
・・・・・・・・安野舞子 FD 推進部講師

15:15-16:15 魅力ある授業に向けて・・・・・・・・・・
・・・・・・・・金馬国晴 FD 推進部兼務教員

16:15-16:30 質疑応答・・・・・・・・・・FD 推進部



第一部 鈴木学長の講演

第二部の冒頭は上野 FD 推進部門長による本学における FD 活動の説明である。よりよい学生を育てるために FD は存在していると強調し、そのために FD 推進部が教員向けに用意している様々な企画が紹介された。そして、授業をする教員が楽しくなければ、授業を受ける学生は楽しくないと述べ、FD は Fun Development と講演を締めた。



第二部 “授業コンサルテーションの紹介”
で質問する参加者

安野講師による授業コンサルテーションの紹介があった。この企画は今年度から開始した FD 推進部が教員個人へ提供する授業改善へのサービスである。大学教員は個人で閉じた世界で授業をすることが多く、授業に関する悩みを自分自身で解決しなければならないことがある。その時に共に考え、共に解決の方策を探す役を FD 推進部が行うことが紹介された。

第二部の第三企画は、参加者同士が議論するワークショップ形式で行われた。テーマは「授業科目で学生との関わりで大切にしたいこと、大切にしたいと思っていること」である。参加者が思いついたことを付箋紙に書き込み、グループ内で個人意見を紹介しながら、書かれた項目を分類する



第二部のワークショップで課題を説明する金馬 FD 兼務教員

ワークショップである。グループは、年代で分けられており、ほぼ同じ教育に関する経験量を持つ教員が同じグループに存在する環境で議論を行った。

グループ内の討論が終了した後に、話された内容を公開し、意見の共有を行った。発言された内容を以下に示す。尚、以下の分類は著者が行ったものであるが、グループ討論で同様の分類をされているグループが多かった。

◆社会を見据えて教育する

- ・大学で勉強することが、産業・社会の要求に答える頭を作る方向へ向けることが大切である。
- ・関連分野の講師を呼ぶことで、学生の視野を広げる。
- ・学生に実社会での役割を理解してもらう。
- ・実践性を重視し、具体性のある課題で学ぶ楽しさを味わってもらう。

◆学生の自律性を活性化する

- ・学生に好奇心をいかに持ってもらうかを考えながら講義を進める。
- ・教員が教えるのではなく、学生が自分の頭で考える授業を目指す。
- ・学生に説明させることで、自律性を育てる。

◆学生の理解度を常に確認する

- ・こまめにレポートなどで学生の理解度を確認しながら講義を進める。
- ・講義を聴くだけでなく、実際に手を動かす演習を入れる。
- ・実験でも、考えてから手を動かすように導く。

◆学生とのコミュニケーションを重視する

- ・レポートは学生一人一人に説明して返却することを試みる。
- ・学生からの質問が絶えなく出てくる講義を行いたい。

初任教員の中には、まだ学生と接した経験のない方から他大学で豊富な教育経験を持っている方



グループ討論中の参加者

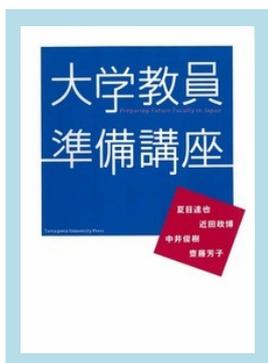
まで幅広く、所属部局も様々である。さらに、担当科目も、学部生の実験指導、通常の教室での講

義、大学院の実務指導と形態も多様である。その中で今回のテーマは「学生との関わり」が多様な角度から見つめられた結果となった。

教育経験の浅い教員には、他の教員が苦勞して解決した方策を知る機会となり、有益な知識を習得する場となった。教育経験のある教員には、自分の教育方針を同僚と確認し、改めて教育姿勢を見直す場となった。それぞれの立場で、習得した情報は異なるが、参加者には満足いただけことがアンケートに現れている。また、日常業務の忙しさに流される教員にも、このような情報共有の時間を持つことの大切さを主催者側は改めて実感した。

書評「大学教員準備講座」

著者：夏目達也、近田政博、
中井俊樹、齋藤芳子
出版社：玉川大学出版部
ISBN：978-4-472-40400-9
価格：2400円(税別) 初
版：2010年3月15日



大学教員のテキストのような本が出版された。今まで大学における講義の教授法など、教員の仕事の一面に触れた書籍は多く出版されている。しかし、紹介する本は目次を見ても分かるように、教員の仕事の全般にわたって書かれている。

著者らは名古屋大学高等教育研究センターの教員である。当センターは「成長するチップス先生」など大学教員の教育法に関する出版物があり、FD関連では名高い機関である。本書も名古屋大学で行われている大学院生を対象とした大学教員準備プログラムの経験を生かして執筆されたものである。

大学教員が前もって知っておくべき知識や大学から求められている内容が書かれている。さらに、詳しく勉強したい読者のために、各章ごとに3冊の推薦図書、合計52冊が挙げられている。初任教員には必読の一冊である。

目次

- 1章 大学教員という職業
- 2章 授業を設計する
- 3章 教授法の基礎
- 4章 学習成果を評価する
- 5章 学生に書く力をつけさせる
- 6章 学生のキャリア形成を支援する
- 7章 大学教育におけるネットワーク
- 8章 研究のマネジメント
- 9章 社会サービスに取り組む
- 10章 国際化のなかの大学教員
- 11章 大学教員の倫理
- 12章 多様な高等教育機関
- 13章 大学教員のライフコース
- 14章 大学教員への第一歩

平成 22 年度 TA 研修会報告

FD 推進部 上野誠也

研修会の目的

学生に実りある教育のためには、教員のみならず職員や TA のサポートが重要な役割を担っている。従来は教員個人の判断に TA の職務に関する指導が任せられていたが、より高度な教育水準を保つために FD 推進部は TA を対象とした研修会を平成 21 年度から開始している。TA としての義務や責任を認識してもらうとともに、実際に受講学生と接する場面を想定して、TA としての対応を考えてもらう研修会である。これを機会に、本学の教育を担う TA としての自覚を持ってもらうことを目的としている。

今年度の改善点

平成 21 年度の TA 研修会は、本学の初めての試みであった。年度初めに実施を決断し、企画準備に時間を要したために 12 月に開催することになった。TA 業務がほぼ終わる頃の開催となってしまった。参加者からも開催時期は TA 業務が開始する前がよいと多くの指摘があり、今年度は年度初めに開催することを前年度の FD 推進部会で決定した。

ところが、部局によって TA 業務の開始時期が異なっている。工学部などの理系は 3 月には TA が決まり、4 月から業務が開始している。一方、教育人間科学部は 4 月末ごろに TA が決まり、5 月から業務が始まる。両者を同時に行うことは物理的に不可能である。そのために、理系科目を担当する TA を対象とした「TA 研修会—実験・実習担当—」と文系科目を担当する TA を対象とした「TA 研修会—講義担当—」の合計 2 回の研修会を開催することとした。さらに、講義時間との関係で開講科目の少ない 5 限に開催した。尚、前年度は外部講師を招いて実施し

たが、今年度は FD 推進部で研修内容を検討し、自らの手で実施した。

研修会内容

研修会のプログラムは昨年度の例を踏襲した。ただし、参加者が取り組む課題については、受講者の要望もあり、討論が進むように見直しを行った。

プログラム

1. TA の役割と責任 (15 分)
TA が行うことができる業務や TA が負う責任の範囲を質問形式で問い、講師が説明する。
2. TA 実践ワークショップ (35 分)
TA 業務中に実際に遭遇する場面を想定して対応策を参加者で討論・発表し、講師がアドバイスする。
3. TA 経験者インタビュー (15 分)
経験者に実際に起こったトラブルなどを紹介してもらい、実情を理解してもらう。
4. 質疑応答 (10 分)
質問票に記載された事項に講師が回答し、必要に応じて追加の説明を加える。

研修会の中心となっているのは、TA 実践ワークショップである。解答が唯一でない質問を用意し、参加者同士が議論することで、TA としての自覚を持ってもらうことが狙いである。「TA 研修会—実験・実習担当—」と「TA 研修会—講義担当—」とでは、この部分の質問内容を業務内容に合わせて変更している。尚、短時間で複数の課題を取り組ませるために

ジグソー形式を採用した。これは、グループ毎に異なる課題を与え、議論の後に報告することで議論内容を共有するものである。

実施報告

1) 実験・実習担当

開催日時：平成 22 年 4 月 15 日(木) 5 限

開催場所：工学部事務棟 第 1 会議室

参加者：TA 77 名（工学府 57 名、環境情報学府 19 名、国際社会科学部 1 名）、職員 数名

工学府院生を中心に多くの TA が集まった開催となった。今年度から初めて TA を担当する院生が大半を占め、質問票には受講学生の質問に答えられ

るかどうかという不安が多く書かれていた。「TA 実践ワークショップ」で取り上げた課題は左下の図の 3 課題である。会場を 3 分割し、さらに 3~5 名のグループで討論させた。他の TA がどのような考えを持っているかを知ってもらおう意図があった。

与えた課題はそれぞれ目的があり、(1)学生と TA の立場の違いの認識、(2)学生とのトラブル対応、(3)教員の指導方法の理解である。(1)では毅然とした態度をとることも必要であると説明し、(2)では一対一のトラブルは避けることをアドバイスし、(3)では教員との事前の打合せの重要性を解説した。しかし、問題が発生した状況により対応が異なるのが教育現場である。特に相手が多様な学生であるので、マニュアル化できない臨機応変の対応が望まれる。そのため、背景となる考えを中心に回答の解説を行った。

事後のアンケートを見ると、2,3 名が研修会に不満を述べている。マニュアルを配布すべきだとかワークショップは不要だという意見である。公式を覚えれば解答が書けるという考えで教育を行おうとしている。マニュアルを作成することも検討するつもりであるが、そこには「状況に応じて判断することが大切である」と書かれると思う。担当教員からも状況に応じた対応が必要だと TA に教えていただきたい。

参加者の多くは研修会に満足したようである。「必修にすべきである」「毎週開いて欲しい」などもっと学びたいという意欲が見られた感想もあった。実験固有の問題として、事故対応や試薬の研修を開いて欲しいという要望もあった。FD 推進部では対応できないので学部の FD 活動として取り上げていただきたい。

質問事項の中で最も多かったのは給料のことである。「他研究室の TA より作業内容が多いのに給与は同じである」「この研修は有給か」「実験の終了時間

実験・実習担当の課題

【課題 1】TA の田中君は学生が質問しやすい雰囲気作りにと頻りに学生たちに声をかけて良好な関係作りに励んだが、一部の学生とは「ため口」を利くほどの友達関係となった。このままでよいのだろうか。

【課題 2】天秤 4 台並んだ机で学生が秤量している。天秤の周りには丸めたキムワイブやこぼれた試薬粉末が散乱している。これに気がついた TA の田中君はその学生に「汚れているから天秤の周りを掃除して下さい」と言うと学生は「汚くしたのは僕じゃないですよ」と反論してきた。田中君はどうしたらよいのだろうか。

【課題 3】テキストに「1 リットルの水をよく沸騰させた後、冷却してから試薬を溶解させる」と指示がある。学生は水を沸騰させた。そこに通りかかった TA の田中君は学生に「もう火を止めてもいいですか」と尋ねられた。どのように答えたらいいだろうか。

が異なることは給与に反映されているか」などである。多くの質問が TA から寄せられているので、担当教員は給与に関して TA によく説明する必要があると感じた。

2) 講義担当

開催日時：平成 22 年 5 月 26 日(水) 5 限

開催場所：教育人間科学部事務棟 大会議室

参加者：TA 10 名（教育学研究科 7 名、国際社会科学研究科 3 名）

事前のアナウンスがよく伝わっていなかったか、参加者がやや少なめであった。講義担当を対象としているので、学生の出席管理やゼミでの発言などを担当することを念頭において研修会を企画した。「実践ワークショップ」で与えた課題を以下に示す。

講義担当の課題

【課題 1】5~10 分、遅刻してきた学生たちがいた。TA の田中君は、出席についてどのように考え、カウントしたらいいだろうか。

【課題 2】討論始め、といわれたのに、学生たちはじっと資料を読むか、誰かがアクションを起こすのをうかがっている。TA の田中君は、どう声をかけたらいいだろうか。

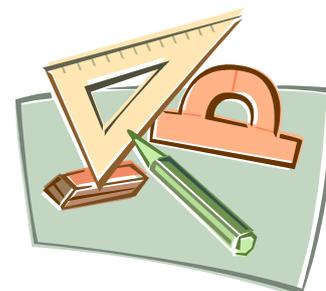
【課題 3】TA の田中君は、学生たちとの関係づくりに励んだが、一部の学生とは「ため口」を利くほどの友達関係になった。このままでよいのだろうか。

講義担当として課題を選んでいるが、本質的には実験・演習担当の時に行った質問と類似である。授業固有の規則がある中での学生との対応、授業への関与、学生と TA の立場の違いを認識してもらうための課題である。参加者を 3 グループに分け、それ

ぞれのグループで 1 課題を議論する時間を与えた。個人の意見を付箋紙に書かせ、それらを説明しながら全体の意見をまとめあげる KJ 法を用いた。その後、各グループから討論内容を発表させた。グループで統一した意見にまとまらず、状況に応じた複数の対応策を発表したグループや賛成派と反対派の両意見を発表したグループもあった。主催者側が意図した様々な意見を出しあう目的は達成できたようである。

質疑応答の時間では、やはり給与に関する疑問が示された。担当教員が TA に対して十分な説明を行っていないようである。FD 推進部からは一般的な説明しかできないため、各担当教員から詳細を伺ってもらいたい旨を説明した。

講義担当の TA は、担当する講義を受講した経験があれば、研修を受けなくても業務が遂行できると考えがちである。しかし、当 TA 研修会においては、自分とは異なる他の TA の意見を聞くことができる。これは自分の経験に幅を持たせることになる。今回は開催の通知が十分に行き届いていないようであり、参加者が少なかった。担当する教員には、TA に当研修会の参加を勧めていただくことをお願いしたい。併せて、次回はより多くの TA が参加するように十分な広報活動を行うことを反省事項として残したい。



授業コンサルテーションの紹介

FD 推進部特任教員 安野舞子

大学教育総合センターFD 推進部では、授業運営の振り返りや、より善い授業づくりを目指しておられる先生方を対象に、本年度よりコンサルテーション事業を開始いたしました。

本学ではこれまで、「授業評価アンケート」をはじめ、FD 推進部が主催する「FD シンポジウム」や「FD 合宿研修会」、各部局における FD 活動など、複数／大勢の先生方を対象とした様々なFD 活動を行って参りました。しかし、授業とは本来、担当教員個々のオリジナリティに溢れたものであり、「授業の数だけ悩みや課題がある」と言っても過言ではありません。

そこでこの度、個別ニーズに対応したFD 活動として本コンサルテーション事業を実施し、先生方と一緒に“より善い授業づくり”を目指したいと考えております。

なお、「授業コンサルテーション」と聞くと、「ダメな教員が受ける再教育プログラム」といったネガティブなイメージを連想される方がいらっしゃるかも知れません。しかし、本コンサルテーションは、あくまでも「より善い授業をしたい」、「新しい授業方法を開発したい」という思いを抱いておられる先生方に対し、必要な情報を提供させていただき支援事業であり、決して「再教育プログラム」ではございません。

学生の学びを最大限に引き出すために、どのような授業ができるだろうか——そのような思いの下、“一緒につくるより善い授業”をモットーに本事業を展開して参りたいと思います。

授業コンサルテーションの概要

【対象】

コンサルテーションを希望する本学専任教員

【目的】

1. コンサルテーション希望教員が、コンサルタン
ト (FD 推進部特任教員) と共に、自身の教育活動の中で生じる疑問や不安、問題点等について理解深め、問題解決のための方策を見出す。
2. 「横浜国大のあるべき授業の姿」について考える。
3. 本事業を通して、より信頼度の高いコンサル
テーション・プログラムを構築する。

【実施方法】

a. Midterm Student Feedback (MSF, 「中間期の振り返り」)

MSF とは、学期半ば頃に学生に行うヒアリング調査のことで、

- 1) コンサルタントが依頼を受けた授業に入り、個人およびグループワークにより学生から「学習を促進・低下させた教員の言動」について聞き取る（「低下させた言動」については、必ず改善案を出してもらう）
- 2) 教室から退出後、コンサルタントは学生の意見を整理し、後日担当教員にフィードバックするという方式のものです。学生からの聞き取りは20分程度で終わりますので、残りの時間は通常の授業を行っていただくことができます。

b. 授業参観、ビデオ撮影

希望される先生の授業をコンサルタントが参観し、コメントをお伝えしたり、授業をビデオ撮影して映像をお渡しいたします。

※本コンサルテーションではMSF をメインに行って参りますが、ご希望の先生方には授業参観やビデオ撮影も行います。

授業コンサルテーション 学生のコメントシート			
※コメントの最後にある括弧内の数字は、回答した人数を表す			
<改善要求点>			
科目名：〇〇〇〇	現	変	変
担当教員：〇〇 〇〇先生	状	更	更
実施日：2010年〇月〇日	維	す	不
コンサルタント：安野舞子（大教センター FD推進部）	持	る	可
■ 授業内容			
例題を解いてほしい			
小テストやレポートができる授業をしていない →もっと細やかな説明を心がけてほしい			
詳細であるがゆえに、記録に残すのが困難 →もう少し細かい板書かレジュメがほしい			
■ 板書			
要点を簡条書きにし過ぎていて、ノートを見直した時に理解しにくい所がある（2） →もう少し文章で書いてほしい			
板書の量が多くて、頭で理解できない（2） →配布資料に記載してほしい			
板書にレジュメ以上のことがない →レジュメの記述の注意点など補足がほしい			
■ 話し方			
口頭で大事な所を伝えることがあり、書くのが追いつけなくて聞き逃すことがある →もう少しゆっくり話してほしい			
<授業の良い点>			
■ 授業内容			
・分かりやすい（8）			
具体例なコメント：			
・自分たちが分からなそうなことを詳しく説明して下さる			
・適切な図や説明があって分かりやすい			
・授業の始めにこれから学ぶ事を解説してくれているので分かりやすい！！			
・話が面白い（2）			
・レジュメ／資料が充実している（2）			
・授業がまとまっている			
■ 板書			
・板書がきれいでノートが取りやすい（2）			
・板書が図など豊富で見やすい			

図1 フィードバック用の「学生のコメントシート」例

【コンサルテーションの流れ】（MSFの場合）

1. 事前面談
コンサルタントが入る授業の概要、学生の様子、授業について気になっている点（フォーカス・ポイント）等について、科目担当教員からお話を伺います。
2. MSFの実施
3. 事后面談（フィードバック）
コンサルタントがまとめた「学生のコメントシート」（図1）を科目担当教員に手渡し、内容を確認していただきます。本コメントシートの内

容をもとに、当該授業について意見交換をしたり、科目担当教員が課題解決を希望すれば、コンサルタントは解決策の模索に共同で取り組みます。また、本セッションでは、本学における「あるべき授業像」や、本コンサルテーションの在り方についてのご意見も伺います。

授業コンサルテーションのご依頼は、随時受け付けております。ご希望の方は、FD推進部特任教員の安野（yasuno@ynu.ac.jp）までご連絡ください。

大学コンソーシアム京都主催 第15回FDフォーラム シンポジウム「学生の学びを支える 一つなぐFDの展開」参加報告

FD推進部門長 上野誠也

全国規模のFDフォーラム

平成22年3月6、7日に同志社大学で開催されたFDフォーラムにおけるシンポジウムを報告する。主催者は京都市内の単位互換制度のために設立された組織である。1995年に第1回FDフォーラムを開催してから、回を重ねる毎に参加者が増え、今回は全国から約1000名の参加者があった。定員で登録が制限されるほどに全国のFDer¹⁾から注目されている。地域組織のフォーラムでありながら、全国大会に匹敵する企画であり、FD活動の西高東低²⁾を物語っている。

「つなぐ」をテーマに

今回のテーマに「学生」が含まれていることにお気づきであろうか。最近のFD活動は、教員個人の能力よりも学生の学びに視点が移行している。学生が自発的に学ぶ姿勢を持つためには、教員は、職員は、さらには、学生は何をしなければならないかという論点が多く語られている。本フォーラムも教員個人よりも大学に所属している全ての人達による組織力へ期待する課題を取り上げていた。ここで言う人達とは、教職員のみならず学生も含まれている点を忘れてはならない。これらの人達を『つなぐ』ことによって、従来の形にとらわれない新展開を探し、学生のための新たなFD活動を見つける機会として、今回のFDフォーラムが位置付けられていた。

学生をつなぐFD

岡山大学の橋本教授から、教員と学生あるいは学生同士をつなぐFDに関して、3つの視点で講演があった。

まず、組織としてつなぐ点である。岡山大学には「学生・教職員教育改善専門委員会」という組織があり、学生と教職員が一同に会して教育改善を議論する場がある。学生の発案による授業科目の新設などが実績として紹介された。この種の組織は全国的な広がりを見せており、本学でも本年度から立ち上げる予定である。

第二の視点として、授業で学生をつなぐ「橋本メソッド」の紹介があった。少人数グループによる課題の発表を競い合うことで、自分の能力に気が付く自己再発見、他人の能力に追いつこうとする相互集団教育が育つという効果を得ているという報告である。

最後の報告は、心で教職員と学生をつなぐという内容である。誰でも持っているはずなので、この意識を再確認しようという提案である。学生も教職員と同じ大学教育のメンバーであり、機会があれば主体的に動くことを忘れずにFD活動を進める必要性を感じた。

職員をつなぐFD

名城大学大学教育開発センターの神保主査からの報告である。名城大学のFD活動は教職員が協力して進めており、学内のFDシンポジウムには学外からも参加者が見られるほど充実している。FDニューズレターは学生へも配布しており、教職員と学生がつながったFD活動を実施している。

本学における公開授業に相当する授業参観に関する報告があった。授業には、教員だけでなく職員も参加しており、授業後に授業検討会を開いて工夫を共有する語りの場を設けている。実は、学生と

接している機会は教員よりも職員の方が深いということから、よりよいFD活動には職員のためのSDの充実が重要であると結論された。大学にいる全ての人が大学教育について考えることの必要性を感じた。

教員をつなぐFD

これは一番難しい課題である。その理由は、大学教員という人種は自意識過剰の集まりである。同志社大学教育支援機構長の圓月教授はこのことを「大学教員の94%は自分が同僚より優れていると感じている。」と示した。会場が苦笑いで埋まった。おそらく根拠の無い数字だと思うが、誰もが納得する数字である。

このような環境の中でどうやって教員をつなげばいいのか。特効薬は無いかもしれないが、時間をかけて効いてくるポイントが示唆された。まず、「2・6・2の法則」を心静かに受け入れよ。FD活動に対して、教員の2割は何をやっても賛同してこない深海魚³⁾と呼ばれる教員である。ここはあきらめて、教員をつなぐFDは中間層の6割の教員を対象に進めると成功するというアドバイスである。そして、「不和をもって尊しとなす」を座右の銘とせよ。おっと、「和をもって・・・」ではない！FD活動は底上げに力を注ぐのではなく、中間層を引き上げることで全体の質の向上が得られるというFDダイナミクスを改めて実感した。

大学をつなぐFD

最後の登場は山形大学高等教育研究企画センターの小田教授である。東日本でFD活動の実力者と問えば、多くの人が小田教授を挙げるほどのバイタリティーのある方である。大学をつなぐというテーマに、東日本の大学をネットワークでつないでいる“つばさ”が紹介された。

FD活動を推進している組織はどここの大学でも小さな組織である。文部科学省のFDの義務化に対しては、特に小規模大学では対応できないのが実状である。そこで大学間で情報を共有することでFD活動を進めるとというのが狙いである。大学間の「協同」によって教育の質を確保しようという姿勢が感じられた。

楽しいFDへ

教育方法の改善を目指した教員個人が行う狭義のFDからカリキュラム改善までを含めた教育組織で行う広義のFDへと時代は変化している。評価も教員個人から大学集団へと視点を変えている。そのためには学生も構成員として考え、大学にいる全ての人がFD活動に参加することが必要である。底上げよりも頂点を伸ばす方向を重視し、やらされ感のないFD、当事者が楽しいと思うFDを実現することが大切であるということを実感したフォーラムであった。

FD 裏用語

- 1) **FDer** : 「エフダー」と読み、FD推進活動の担当者を指す。これが正確に読めるということは、FD活動に関係していることを意味するので、FD関係者のコミュニティー内で自らを呼ぶときに使われている。類語にFD活動を推し進める指導的立場の教員を指すファカルティ・デベロッパーという言葉もある。いずれも現代用語辞典に載るようにFDer達は日々努力している。
- 2) **西高東低** : 日本におけるFD活動の活発さを指す。西日本の大学によるFD活動は盛んであり、京大、立命館大、岡山大、広島大、愛媛大などが有名である。これらの大学が企画するFDフォーラムなどには、全国からFD関係者が集まる傾向がある。東日本にも個性豊かなFD活動を行っている大学があるが、東西を比較すると東は低調に見えてしまう。がんばれ東日本！
- 3) **深海魚** : 授業方法の悪い教員を指す。本来ならばFD活動の授業改善に関する企画に参加して、自らの授業方法を改善しなければならないはずである。しかし、この種の教員ほどFD活動に全く参加せず、深く潜って明るい水面へ現れない。強制的にFD活動へ参加させようとしても、水圧の違いで爆発してしまうので、これもできない。困ったもんだ。

岡山大学訪問調査報告

FD 推進部特任教員 安野舞子

訪問日時： 平成 22 年 2 月 4 日（木）

訪問先機構・応対者： 教育開発センター・橋本勝教授、佐々木健二教授、山内源氏

訪問者： FD 推進部 金馬国晴、安野舞子、福富洋志、教務課 鈴木誠彦、鈴木幾久子

FD 推進部では、予てより、岡山大学の「学生参画型教育改善活動」に着目してきた。例えば教育人間科学部では、数年前から学生による授業改善懇談会を実施しているが、それなりの成果はあるものの、年に一度きり集まる程度に留まっていることから、もっと踏み込んで定例の会にしたり、組織化できないか、という関心があったという。そのような声を聞き、学生参加による授業改善の取組に一定の成果が見られるならば、一部の部局だけでなく、全学的に何かできないだろうか——このような関心を、FD 推進部としてもっていたのである。

そこで今回、「学生参画型教育改善活動」を全国でも先駆けて取組んで来られた岡山大学にお話を伺うべく、訪問した。今回、我々を受け入れてくださったのは、同大の FD 活動を牽引しておられる、教育開発センターの橋本勝教授、同センターの FD 専門委員会委員長の佐々木健二教授（薬学部）、そして後述の「学生・教職員教育改善委員会」の立ち上げ時には現役学生として携わっておられ、現在は特別契約職員として引き続き関わっておられる山内源氏である。以下は、今回の訪問調査で得た知見についてのまとめたものである。

岡山大学において本格的な学生参画型教育改善活動が推進され始めたのは平成 13 年からである。もと

もと岡山大学では、FD に関して、「FD は本来、教員一人一人が授業改善することに主眼があるのではなく、あくまで教育組織として、全体としての教育をどう改善し、発展させていくかという観点が重要」というスタンスをもっており、よって、教育改善の実効性を上げるためには、教職員の連携だけでなく、教育サービスの受容者である学生の主体的参画が必要である、との考え方が伝統的にあった。

そこで、「教育シンポジウム」の企画に学生を加えることに始まり（平成 10 年度頃）、同シンポジウムへの学生の参加者が増え続けていく中で、平成 13 年度には FD 専門委員会の下部組織として「学生・教員 FD 検討会」が設立された。その後、永続的に維持・発展するシステムの構築を目指し、平成 16 年度には「学生・教員 FD 検討会」を改称、組織強化して「学生・教職員教育改善委員会（以下、改善委員会）」が設立された。こうした学生参画型教育改善活動の推進は、平成 17 年度に「特色ある大学教育支援プログラム（特色 GP）」に取組が採択されることにより、「学生参加型 FD」の先駆けとして全国的に注目を浴びるようになった（取組名称：「新機軸「学生参画」による教育改善システム」）。

本取組の推進軸となっている「改善委員会」の特徴は、その組織の委員長が学生、ということにある。副委員長には、今回ご対応くださった橋本教授が就任されているが、この「学生が委員長」というところに、学生の主体的参画を実践する岡山大学の“本気度”が見て取れると言っても過言ではない。

「改善委員会」は、学生 30 数名、教員 10 数名、職員若干名で構成されている。学生委員は、基本的

には毎年各学部から1年次生を推薦してもらい(6月)、3年次6月までの2年任期となっている。我々は、「1年次生からだ、まだ大学に入ったばかりでほとんど何も分らないのではないか?」という疑問をもったが、この「改善委員会」が対象としているのは教養教育であり、その教養教育は1年次から始まり2年次で終わってしまうので、1年次生から入ってもらっている、という回答には納得した(ちなみに、学部によっては「改善委員会」と類似した学生委員会のような組織を持っているところもあり、そのような学部では専門教育においても学生参画型の教育改善活動を行っているという)。

なお、学生委員は教員からの推薦によって選ばれるので、中には最初は不本意で委員になる学生もいるようである。しかし、他の意欲のある学生と活動し、その活動を通して目に見えて結果が現れてくると、最終的には、もともと意欲のある学生と同じくらいにまで成長しているという。

「改善委員会」は、いくつかのワーキンググループ(WG)に分かれて活動を行っており、主だったものとして、システム改善WG、授業改善WG、学生交流WGがある。システム改善WGでは、物理的な学習環境の改善や修学上の制度改善について提案を行っている。

一方、授業改善WGの活動の中でも特に目を引くのは、「新授業創作活動」である。これは、「学生発案型授業」のことで、学生のみから見て「あったら良いな」「是非受けてみたい」と思う授業が発案され、それが実現する、というものである。これまでに開講(実現)された授業は6つほどあり、代表的なものとしては、橋本教授が担当されている「大学授業改善論」(教養教育科目)がある。このような「学生発案型授業」は、ともすると「単に学生のニーズに合わせた、教育的な視点を欠いた学生におもねる授

業になるのではないか」という印象を与える可能性があるが、実際にはWGを中心に、全学のFDフォーラム等も利用しながら、教職員と共に議論を深めつつ活動に取り組んでいるので、決して「学生におもねる」ような授業とはなっていないことが分かる。

最後に、学生交流WGの活動には、新入生のための履修相談会の実施や、教育改善に関する大学生の交流イベントの企画・実行が含まれる。特に後者は、学内だけでなく、大学教育の改善に興味関心をもつ他大学の学生や教職員との交流になっており、「教育改善学生交流 i*See」というネーミングで平成16年度から現在に至るまで毎年行われている(FD推進部からも過去数回委員が参加している)。本交流会に参加する学生は、他大学の学生・教職員と触れ合うことにより、新たな発見をしたり、自大学を見つめ直す機会を得ることができ、大変良い刺激になるという。今後学生参加型FD活動を目指す本学からも、是非とも本交流会に学生を派遣していきたい。

今回の訪問調査を通して感じたのは、「学生参画型教育改善活動」というのは、「FD活動の特別な形」なのではなく、本来あるべき「FD活動の姿」である、ということである。それは、「誰のための教育改善か」ということを考えれば当然の帰着であり、つまりそれは、岡山大学が指摘するように「教育サービスの受容者である学生の主体的参画が必要である」ということである。

今回岡山大学から学んだ多くの知見を、今後本学におけるFD活動に大いに活かしていきたい。



FD合宿研修のお知らせ

日時 9月2日(木)～9月3日(金)
場所 八王子セミナーハウス(東京都八王子市下柚木 1978-1)

《テーマ》

1. 評価って？ —各科目から各部局・大学全体まで

沖裕貴先生(立命館大学 教育開発研究機構教授)の講演とシラバスづくりのワークショップ。

ミクロレベルでは個々の科目のシラバス作成(到達目標の立て方～成績評価)から、マクロレベルでは各学部・学科のディプロマ・ポリシー(本学で言う YNU initiative)の成果測定に至るまで、網羅的にお話していただく予定です。実際に、シラバスづくりもやってみましょう。

2. 学生参加型FDのケースと国大での可能性

梅村修先生(追手門学院大学)と学生たちが参加します。本学でも、学生スタッフの募集を始めますが、その先例などを伺います。本学学生にも参加してもらっての「しゃべり場」も試みる予定です。

《日程》

【第1日目午後】12時前に集合し、昼食後、13時からプログラム1～3。

終了後、夕食を兼ねた懇親会

【第2日目午前】プログラム4～5

【第2日目午後】プログラム6(研修会全体の総括ワークショップ)。閉校式。

※詳細は別途配布されるメールやポスターをご覧ください。

※教職員はどなたでも参加可能です。(申込は教務課大学教育係まで)

本誌への原稿を募集しております。また、ご意見・ご感想をお寄せください。

YNU FDニュースレター No. 12

編集/横浜国立大学 大学教育総合センターFD推進部

作成担当: ニュースレター・ワーキンググループ

事務担当: 教務課大学教育係

問合せ先: kyomu.kyoiku@ynu.ac.jp

発行/平成22年6月 発行